

おひな様の歴史

奈良時代～平安時代

桃の節句は上巳（じょうし）節と呼ばれ、もともとは中国の古い行事で三月の最初の巳の日に川辺で身や心を清め、厄を洗い流すお祓いとして行われました。日本には唐の文化とともに渡り、文武天皇の頃（七百年ごろ）巳の日が年ごとに変わることから、上巳節は三月三日と定められました。当時の習わしは、紙や草で作ったひとがた(人形)に我が身の厄を移し、かたしろ(身代わり)として川や海に流すものでした。

平安時代には、貴族の女児の雛遊びと形代(かたしろ)流しが混じりあい、形代の立雛が生まれました。その後、上等な立雛は流さずに屋内に飾るようになり、安定の良い座り雛もつくられました。当時の乳幼児死亡率は現代とは比較にならないほど高く、赤ん坊のうちに亡くなることは珍しくはなかったため、親としては必死の思いでこの成長を見守り、枕元には形代を置き、厄除けとしました。そして、1年の災いを、春のひな流しで祓う。これが、「おひな様」の起源とされています。

室町時代～安土桃山時代

「上巳(じょうし)の節句(せっき) (穢れ払い)」が定着したのは室町時代ですが、戦国時代や安土桃山時代など、戦が絶えない時代においては、「おひな様」は未だ穢れを祓う儀式的なものでした。やがて戦乱の時代が過ぎ、世の中が天下泰平になってきた江戸時代によく「おひな様」の風習が庶民へも広がり、女児や女性を祝う華やかなお祭りとして多くの人に伝わりました。

江戸時代

江戸時代初期には形代(かたしろ)の名残を残す立った形の「立雛」や、座った形の「坐り雛」(寛永雛)が作られていましたが、これらは男女一対の内裏雛を飾るだけの物でした。しかし、飾り物としての古の形式と、一生の災厄をこの人形に身代りさせるといふ祭礼的意味合いが強くなり、武家子女など身分の高い女性の嫁入り道具の家財の一つに数えられるようにもなりました。そのため、自然と華美で贅沢なものになり、時代が下ると人形は精巧さを増し、十二単の装束を着せた「元禄雛」や大型の「享保雛」などが作られましたが、これらは金箔張りの屏風の前に内裏の人形を並べた立派なものでした。

江戸時代中期には、菱屋(雛屋)次郎左衛門という人形師が創始した「次郎左衛門雛」があり、団子のような丸顔に引目鉤鼻という、源氏物語絵巻に描かれるような面貌が特徴的で雛の本流として一般にも流行し、典雅で気品に満ちた姿は公家や大名家にも好まれました。

江戸時代後期には、新たに独自の内裏雛として今日の雛人形につながる「古今雛」が現れ、江戸から京にも伝えられました。

「古今雛」は、明和(1764~1772)の頃、江戸の上野池之端十軒店の人形師・原舟月が創案しました。雅な衣装・顔立ちが人気を博し、京都をはじめ全国に広がりました。江戸末期には、雛の眼に水晶やガラスがはめ込まれるなど、つくりも精巧になっています。

明治時代～現代

江戸時代末期からは、京で「有職雛(ゆうそくびな)」とよばれる宮中の雅びな平安装束を正確に再現したものが現れました。

また幕末までには官女・隨身・仕丁などの内裏人形につき従う従者人形が考案されたほか、特に江戸では18世紀の終わり頃から五人囃子人形が現れて人気を集めました。さらに大道具や小道具も増え、京では京都御所の紫宸殿を模した雛御殿や台所用具が作られて御殿飾りとして発展しました。いっぽう江戸では御殿飾りは広まらず、代わりに雛壇と嫁入り道具を用いた大規模な段飾りが発展しました。

鹿沼市に現存する歴史的なおひな様

享保雛

きょうほびな

〔江戸中期、享保年間ごろに流行したと言われる座り雛〕

江戸初期の寛永雛がさらに発展、高級化されたもので、比較的に大型の作品が多く高さ約45cmから、時には60cm以上のものもあります。寛永雛に似た面長の顔で装束は金襴や錦を用い、男雛は両袖を極端に張り、太刀を差し、笏を持った姿。女雛は、五衣、唐衣装で、袴には綿を入れて丸くふくらませ、檜扇を持っています。



古今雛

こきんびな

〔江戸後期に江戸で完成された雛人形〕

男雛は束帯、女雛は五衣唐衣裳（十二単）と上級公家の正装を模すが必ずしも有職故実には則さず、華麗に仕立てられています。女雛が単の袖を長く出し、垂髪に宝冠を被るのが特徴です。

「火事と喧嘩は江戸の華」というように、江戸の町は度重なる大火に襲われました。また関東大震災や東京大空襲によって壊滅的な打撃を被り、こうした中で江戸製のお雛さまは、その多くが失われ、今となってはその存在自体が貴重なものとされています。



有職雛

ゆうそくびな

〔明治以降の古今雛の原型〕

公卿の装束を、有職故実に基づいて正しく雛に仕立てたもので、明治以降にこの名で呼ばれるようになりました。衣冠姿、或いは公卿の平常服の直衣姿のもの（直衣雛）が多く、着せ替えの装束も添えてあります。直衣雛は、男雛には別に束帯装束を女雛には十二単が用意してあって、直衣を脱がせて束帯に替えさせることもできます。顔の彫りも写実的に作られて古今雛の原型になりました。



次郎左衛門雛

じろざえもんびな

〔京都の人形師菱屋次郎左衛門が創始した雛人形〕

上流階級を相手の雛人形でしたが、作者が日本橋室町に進出してきてからは一般にも普及し、従来の享保雛に代わって江戸の人気を独占しました。以降、明和、安永、天明、寛政期まで約30余年間に全く江戸化して上下階級に広く親しまれました。この種の雛は、面長だったそれまでの雛に比べて顔が丸く、引目鉤鼻の典雅な気品に満ちているのが特徴で、男雛は、黒袍に袴をはいた公卿の束帯姿。女雛は、五衣、唐衣に裳の姿で、大小さまざまな種類があります。



紙雛（立雛）

かみびな

たちびな

〔平安時代のものに加え、形代が結びついてできた雛人形〕

その昔、体の部分は平面的な造りの為、ひとりで立つことは出来ず、雛壇や屏風に立てかけて飾っていました。江戸時代になると天兒（あまが）が男子、這子（ほうこ）が女子とされて、男女一對の立雛の原型となったと言われています。室町時代の風俗をかたどって男雛は小袖の袴姿で袖を両方に広げ、また女雛は小袖を前に重ねた細帯姿となっています。この紙雛の形が立ち姿であって雛壇に立てて飾ったことから、立雛ともいわれています。

